

## 幸運の連鎖

木坂 広一

あの時ほど苦しい思いをしたことはない。柏原達夫は死ぬかもしれないと不安だった。胸がキュッと締め付けられ、息もまともにできず、脂汗をかいて舗道にしゃがんでいた。石田利夫がそばに来て不満そうに言った。

「おい、肝心な時にどうしたんだ。困るなあ」

「仕方がないだろう」柏原は辛うじて声を出した。

「今日は中止だな。俺は用事があるから、そっちを片付けて来るよ」

二人は週刊芸能新聞の編集者だった。これから新人歌手の自宅に取材に行くところである。石田はどこかに行ってしまった。彼は交際相手に会いに行ったのだろう。病人のことは無視し、同情心すらない。通りがかりの人が救急車を呼んでくれて、渋谷区内の病院に運ばれた。車内に横たわり、これで助かるかもしれないとそれしか考えなかった。しかし病院のベッドに伏せて、医師の診察を受けている時、あの野郎、許せない！と怒りが湧いてきた。

心筋梗塞と診断され、十日ほどの入院を告げられたが、痛みはその夜から徐々に引いて行った。

(何て冷たい奴だ)

週刊芸能新聞では彼と同期で四、五年のキャリアがあり、時々一緒に仕事をした。石田は評判がよくて社員達から好かれていた。ハンサムでスマート、都会的なシャイな男だと皆から見られていた。男達も眩しげな視線をそそいでいたほどだ。しかし、柏原はシャイという言葉は嫌いだし、好意がもてなかった。石田は写真専門学校を出ていて、報道写真家を目指しているらしく、あたかも前途には光明を見出しているかのようだった。

退院の前日、隣のベッドの老人が話しかけて来た。新聞を読み終わって、ある記事に関心があるらしい。「今の若い人は、お気の毒だね。人生の目的が見いだせないのです。目的のない人は、寿命が短いのです。また持病を持っていると、急死したりするのだそうです」

「そうかなあ。そんなことはないですよ」

「いや、あると思います。若い人の死は精神の衰退から来ることがあるものです」

年寄りには精神主義者でハツタリじみているから、不愉快になった。黙ってベッドを出て、トイレに行った。用を足しながら、そりゃ男は目的を持って社会的に成功して、認められなきゃ、人間じゃないなどと、柏原は知らない訳ではない。それから昼寝をしていたら夢を見た。死んだあと自分の遺体が野原に捨てられ、鳥が何十羽も舞い降りて来て、自分の死肉を啄んでいる光景だった。

病院を退院して会社に復帰すると、親しい同僚の古谷勇一が、石田は結婚して、モルジブに新婚旅行に行っていると話してくれた。

「あいつはひどい奴だよ」 柏原は打ち明けた。

石田嫌いの古谷が聞いた。「何かあったのかね」

例のいきさつを話した。「俺を見捨てて行ったよ」

「彼はそういう性格をしているよ」

「奴さんには、親切心なんて、これっぽっちもなかった」

「よく美人と結婚できたな」

「結婚したら、実態が分るだろうよ」

「そうだろうな」

最初は柏原も古谷も本田マリに好意的だったが石田に凱歌が上がった。と言っても一番年上の古谷は所帯持ちである。彼は後から入社して、貧乏神を自称し将来のなさそうな人物に見えた。大学を出て最初に入った会社が倒産したと思ったら次のところも左前になり、三つ目も：という具合についていない。何とか神を名乗るくらいだから陰気くさい顔つきをしていて、他にも伝搬しそうだった。そうあってはならないと彼は失業中にシナリオ教室に通い、運命の転換を図ろうとしている。

「報道写真家志望の先生は順調だね」 古谷が言う。

「マンションも買らしいよ」

「ふーん、上り調子だね」

「得意の絶頂だよ」

柏原は事業を起こすつもりでおり、チャンスを伺っていた。彼の目的は訳があつて金だった。とにかく金が欲しかった。三人とも失敗した過去があり、だから未来に賭けて取り戻そうとしているのだった。最初に貧乏神の古谷が退社し、その次に柏原、しばらくして石田が辞めてフリーの写真家になった。

三、四年して六本木で石田と偶然に行き会った。駅

の近くのアミーという喫茶店に誘ってお茶を飲むことにした。柏原は印刷会社で校正係のアルバイトをしていて、その喫茶店とはいつの間にか馴染みになった。

「美人がいるよ」

「いいね、俺、モデルを探しているから」

「その店にいる女はモデルにはもってこいね」

店に入ると空いていて、ウエイトレスがコーヒーを運んで来た。柏原は如何にも慣れ親しんでいるかのようには石田に紹介し、彼らは名刺を交換した。入江葉子は意志の強そうなスタイルのいい美人で、ハンサムの《写真家》に反応した。二人とも未知の世界に魅かれ合うように目に光をたたえている。女が立ち去ると石田が感心の体である。

「あれなら、写真雑誌に投稿するのにふさわしいよ」

「シリアスな作品か」

「もちろんだ」

「芸術写真というわけだな」

「当たり前だ」

柏原は話を聞いていて何か芳しくない予感を覚えた。はつきりしないが、暗雲が漂うような気がしてならなかった。もつとも気のせいに過ぎないだろう。しかしどういふ訳だか、父親のことが甦った。その昔、医師

の父が妻子を見捨てて女と駆け落ちしたのだが、医学部の学生だった柏原は宙に浮いたような気になった。

不安というか絶望感というか、どうしようもない気持ちだった。

「彼女を写したら、いい作品になるかもしれないぜ」

柏原は何となく勧めた。

「俺もそう思うな」石田はほくそえんでいる。「いけそうだ。彼女をモデルにして賞を取るよ」

「しかし、本来の方向性とは違って来たな」

報道写真なんか俺の性分に合わない。それよりも美しい女の裸の方が自分には合っているよ。女は神秘だ、俺の心を打つなどと力説した。

「それならいいだろう」

「うん。こっちの方で名声を博すよ。名前を上げることにが至上命令だからな」

「俺はその前に金をためることだ」柏原は本音を口にした。「親父の馬鹿が子供たちに苦勞をかけたからな」

「柏原はワntenポ遅れているな。手段が目的になっている」

「それは親父のせいだ」

「まあ、頑張つてよ」石田の蔑んだような口調。「あ

んたの親友の古谷はまだ書いているのかね」

「あいつは頑張り屋だ、そのうちに世の中に出て来るよ」

「かなり買い被っているな。俺はそうは思わない」

「あんたは奴が嫌いだからな」

「まあ、いいさ」

一時間ほど話して店を出た。店の前で、

「柏原さんはいつ事業を立ち上げるの」石田が興味ありげに聞いた。

「近々だ」彼は結婚していることも話した。渋谷の病院に入院している時に看護師と知り合った。知的ではないが可愛い女だと思っている。

それから数年の年月が経った。アルバイトを辞めると、まとまった金がなくともできる印刷関係のブローカーを始めた。芸能新聞社に勤めていた関係から知人の協力が得られた。やがて軌道に乗り出し、短期間に予想外の利益をあげた。三年ほどで貯金が増え、こんなに順調に行くとは考えなかった。妻の美枝子と喜びを分かち合った。

「あなたの腕がいいからよ」

「君も力を貸してくれたしね」

「私は一生懸命だったわ」

話しながら石田のことを思いだした。石田の嗜好や

些細な癖が頭に浮かんだ。彼は魚が嫌いで食べられない。箸の持ち方が変で二本くっつけて親指で操作し、その奇妙な仕種が彼の精神構造を表していた。その石田が、六本木で会ってしばらくして、電話をくれた。カメラ雑誌に入江葉子をもモデルにした『コヨーテと美女』が一等に当選し、同じ素材の裸の写真をポルノ雑誌に売りたいというのだが、どう思うかと聞いてきた。

「ばれることはないね、載せたつていいじゃないかな」彼は答えた。

「自分もそう思うけど、かまわないよね」

「あんな雑誌を女は見ないよ」

柏原は気軽に返事をした。そんなやり取りをして一年ほどした頃、仕事の方は目に見えないところで、異変が起こりつつあった。二人とも気がつかなかった。五年目に入った頃から受注が減りだし、急激に傾いて行った。いつの間にか美枝子に当たるようになり、つい激しい怒りをぶちまけてしまった。

「君は経済観念がなさ過ぎる」

「私は私で、しっかりやっているわ」

「前から思っているけど、金の使い方がなっていない

ぞ」

「節約をしているわ」

「嘘だ。これを見ろよ」

柏原が手にしているのは高価な指輪で、美枝子が夫に内緒で買ったものだった。問い詰めると二百万円で買ったと言う。何かと自分を責める夫に腹を立てて衝動的に買ってしまったという。そして泣き出した。彼はショックを受け、気丈な美枝子の振る舞いに悲哀を覚えた。美枝子とはいえ弱いところがあるのだ。

「俺も悪かった。涙を拭けよ」

「ごめんね。二度とこんなことはしないわ」

「せっかく買ったんだから、大事にすればいい」

後になって妻に当たり散らしたことを悔やんだ。このままだと借金が嵩むばかりだから、賃貸マンションを出て、江東区の寂れた団地に住むことにした。車その他売れるものはすべて売った。妻は松戸市の親元に移り住んだ。それは美枝子の希望だが、了解するしかなかった。別居が続き、やがて正式に離婚した。

柏原は新宿のビルの管理人になり、週四日勤め、余暇を便利屋の下請けになって稼ぐようになった。そんな時、古谷から電話がかかってきた。彼は喜々としていた。

「面白い情報が入った。石田が肖像権侵害で訴えられた」

入江葉子をモデルにした写真である。余計に写した写真はやはり三頁のグラビアに掲載された。モデルの入江葉子はいい家の娘らしく、そのエロチックな写真が一族の目に止まり、怒りを買った。裁判にかけられ、千二百万円の賠償金を払わせられることになり、とても応じきれないからと弁護士が間に入って八百万円でけりをつけてくれた。そのため石田はマンションを売らざるを得なかった。

「そうか、そんなことがあったのか」柏原はニヤツと笑みを浮かべた。

「良家の娘が、いかがわしい雑誌に裸で載るなんて考えられないだろうな」

「実は俺も相談されてね、遠慮することはないと言っておいた」柏原は面白がっている。

「アハハハ。石田もとんでもない目に遭ったな」

だからといって柏原は自分のせいではないと主張した。古谷もそれはそうだ、そういう肝心なことは本人が判断することだからな、と柏原の肩を持った。

「どこから、そんな情報を仕入れたのかね」と聞いたら、前の編集長にご無沙汰の電話をしたら話してくれ

たそうだ。

「石田は自分で不運を招いたよ」

古谷は冷淡だったが、柏原も同じ気持ちで露骨に喜んでいいる。あんな傲慢な奴は報いを受けても仕方がない……

仕事から帰る途中、都営新宿線の電車に立っていると、横顔に執拗な視線を感じた。異常者ではないかと気味が悪くなり、扉の方に移動した。ガラス越しに何気なく見たら意外にも石田だった。

「何だ、あんただったのか」柏原は近づいて行った。

「やっぱり、柏原さんだ」

「じつと見つめるから、変だなと思った」

人違いかも知れないから声をかけるのも躊躇したと言う。石田は白髪が混じり、やつれていて嫌に色が黒い。会わなくなつて七年が過ぎており、お互いに四十代になった。仕事は何をしているかと石田が聞いた。今の仕事の話をした。

「いい仕事をしているな」石田は何故か感心した。

「食うためなら何でもするよ」

「悪くないよ」

石田の感心の仕方が物欲し気でおかしかった。せつ

かくだから途中下車して、話でもしないかと誘った。すると石田はそんな必要はない、俺は柏原さんと同じ西大島に住んでいるから、と答えた。訳があつてこちらに移つてきた。いずれ柏原に会うだろうと思つていた。そんな話をしながらホームのベンチに腰を下ろした。

「俺も管理人の仕事をしたいけど、ないかね」

「ないことはない」

「あつたら紹介してよ」

「いいよ。心がけておく」

会社から給料の明細書と一緒に募集の知らせが送られてくる。希望者がいたら連絡することになつていてわずかな報酬が出る。毎月のように同封されていて一覽表になつていいる。石田はカメラマンでは食えないのだろう。

「ぜひ、頼むよ。俺、座つて仕事がしたいよ」

「老いる年じやないのに」

「少々疲れたよ」

もっとも、この仕事は闘争心のない奴がふさわしいかも知れない。

「便利屋も俺にできるものがあつたら、やつてみたい」

「いくらでもある」

柏原は餌をちらつかせながら誠意は一かけらもなかった。何と言つても好ましくない人物が掌中にいるかと思うと、加虐的になつた。こんな男のために誰が口を聞いてやるものか；便利屋と言つても楽ではない。

厄介な仕事もあつて時には糞まみれになつて働くことがある。先日も数百万円もする指輪を拾つてほしいという依頼があり、麻布のマンションに出向くと四十代の太り肉の美人風が己の垂れた糞の中にあるはずだと言い、「でも、恥ずかしいわ」シナを作つて照れて見せた。

「大丈夫です。お任せ下さい」

柏原は営業笑いを浮かべた。長いゴムの手袋をはめ、マスクをして取りかかると、よほど腸の具合がいいのか、大盛りが浮いていた。息を止めてかき回しているのとワツカが出て来た。トイレの水で洗つたらそれとなく光っていた。

「わあ、よかった」

女は喜んだ。思いのほか早く見つかり、柏原もホツとした。そして女の秘密を知つたという親しみすら抱いた。性器を見るよりもっと濃密かもしれない。女は財布から札を抜き取り、要求通り三万円払つた。建物

は高級でインテリアも決まっているから、それなりに金持ちなのだろう。石田にこんな仕事ができるだろうか。あいつは気取っているだけでガッツがない。彼は都下の下町生まれだが、根っこの郷土性を捨てて、薄手の都会人になつていだけだ。嫌味なのはシニズムを身に着けて人を冷笑するクセだ。こんな手合いが表現者になれるはずはない。管理人だつて便利屋だつて簡単にいくとは思えない。

九月になつても残暑が厳しく鬱陶しい。西大島の駅の周辺で石田と行き会つた。

「例の件、伝えておいたぞ」柏原は嘘をついた。

「有難う」

「マリさんとは、うまくやっているのかね」

「ああ、どうにか。俺にウオーキングをやれと言うから、歩くようにしているよ」

「写真のネタが拾えるだろう」

「それもあるな。この間、Y公園で、爺さんが倒れていてね、何枚か撮つた」

「病気なのか」

「そうだろうな」

「救急車を呼んであげたのか」

「いや、放つておいた。面倒だからな」

「面倒？ 性格は変らんな」

石田はドキッとしたような表情をした。柏原は含み笑いを浮かべながら、十年前を思い出させようとした。奴は何かを感じているはずだ。が作品としての写真も心がけているようで感心した。

神奈川県登戸で集団登校中の女子生徒を襲った事件が起こって一ヶ月過ぎた頃である。同じ三階の岡野さんが訪ねて来た。何かあると玄関先で立話をしていく六十代の女性である。装飾模様の弦メガネが似合っている。若い頃、デパートの服飾売り場で店員をしていたというから年配者にしてはおしゃれだ。

「あの、先日、兄が亡くなりました、ご挨拶に参りました」

柏原は急な知らせに驚いた。「いつですか」

「六月二十九日です」

病気だそうである。二歳上の兄は公園を散歩していて脳卒中で倒れ、顔見知りの人が近くの病院に車で運んでくれたが間もなく死亡した。十分早かったら助かったと言う。

「それはお気の毒ですね」

「でも、長患いするよりはいいです」

彼女は何の感傷もなく話す。葬儀は密葬ですませ、

自治会にも近隣にも報告していない。母親が死去した時も何もしなかった。岡野兄妹は二人とも独身で世間とは没交渉に過ごしていた。柏原はその兄とは挨拶をかわす程度の関係だった。

「一人暮らしも気楽でいいですよ」

岡野さんは頭を下げて帰って行く。その時ふと岡野さんの兄は石田の話していた爺さんかも知れない。同じ公園で立て続けに事故が起こるとは考えにくい。柏原は意地悪な興味を覚え、夕食を食べてから石田に電話をした。

「聞きたいことがある。この間、倒れていた人は、どんな風貌だったかね」

「どんなって、ただの爺イだよ」

「胡麻塩頭の短髪だろう」

「そう、そんな感じだな」

いつ頃かと尋ねたら、石田はうるさそうに一体どうしたというんだと怒ったように言った。

「その老人の身元が分かったよ」

同じ団地の住民で一軒置いた隣でもあり、妹さんが挨拶かたがた報告に来たと話してやった。もつと早く処置すれば命は取り留めたかもしれないとも。石田はさぞ気分悪いだろう。



「俺は通りがかりに過ぎないよ」石田は言い訳をした。  
「119番くらいはしてあげるべきだ」

「そんなこと、俺には関係ない」

そう言いながら石田は困惑している。電話が終わると、インスタントコーヒーを飲んだ。柏原は満足感を覚え、コーヒーがおいしかった。

秋らしい風が吹き、過ごしやすくなった。帰宅したら石田マリから電話がかかって来たから、何やら期待しながら受話器を手にした。

「お願ひがあります。お電話で夫を脅かすようなことを話されたようですが、腑に落ちません。公園の老人の死は言いがかりに過ぎません。石田は鬱を患っています、精神科に通って治療をしています。私も気が重いです。どうかこの件はご放免ください」

こんな用件だった。マリまで巻き添えにするのは気の毒だと思った。

「配慮します」柏原は答えておいた。

「そう願ひます」

「分かりました」

年が明け、二週間が過ぎた頃、団地の近くで石田と行き会った。悄然としていてまるで元気がなく別人の

ように見えた。

「どうかしたのかい」

「いや、いつもの通りだ」

「お茶でも飲んでいかないか」

親切心からではなく、石田のことを知っていたからだ。彼はのっそりと家にながり、ダイニングキッチンテーブルに座った。日本茶を出した。

「この間、マリさんから電話が来たよ」

「知っているよ。あいつは家を出て行った」

理由を聞いたら、嫌気が差したからだと言う。それにしても石田の身には次々と不運なことが起こるものだ。これからもまだ何かありそうな気がしてならない。

石田は酒を飲んでも酔えなくて、毎日沈んだ気分度過ごしている。府中市の実家では母親が認知症を患っていて、独身の兄が面倒を見ている。どこもかしこも八方ふさがりで参っているようだ。

「そのうち、頼み事があるかもしれん」

「何だね」

「まだ決心がつかないから、いつか話すよ」

石田はマリの言うように鬱症状でかなり重そうだ。

妄想や幻想にも逃げることでできないと言う。マリもシカバネみたいだと愛想を尽かし、家を出て行ったと

いう訳である。

柏原は石田の窮状を古谷に知らせてやろうかと思つていたら先方から珍しくハガキが届いた。宛名の文字がグニャグニャしていたからびつくりした。達筆な彼らしくない。文章を読んだら脳梗塞をやり、体が不自由になったと言うのだ。あえて手書きで寄越したのは、健在をアピールしたかったからである。そして快方に向かつており、毎日パソコンのキーボードを打つて指を慣らしていると書かれてあった。友人の不運に体から毒気が抜けていくように身が軽くなつた。さらに第二便が来て親の遺産が入つたと知らせて来た。人生には何があるか分からないものだ。急に石田と話したくなつて電話をかけ、その不幸な様子と遺産の話をしてやつた。

「せつかく金が入つたのに、運の悪い奴だ」石田は言下に言つた。

「こんなもんだ。彼には、もともと才能がないから、書くこともないさ」

「柏原は、前はずいぶん誉めていたけどな」

「本音は違うよ」

「奴を認めていないのか」

「悪く言えないよ、友人だから」

「嘘をついていたんだな」

「そういうことになる」

「俺は救われるけどな」石田も現金だ。

「よかつたな」柏原は笑つた。

「ところで、話がある」石田が話題を変えた。「死ぬのを手伝つてくれる便利屋を知らないか」

「マジか」柏原は呆氣にとられた。

「マジだよ」

この間、自殺未遂をしたと打ち明けた。自宅の鴨居で縊死しようとしたら紐が切れてやり損ね、簀子すしこの上に倒れて怪我をした。こんなこともあつて、自分では死ねないから協力者を探しているというのだ。石田の話聞いてみると、生きる意欲がなくて生命力も落ちたようだ。こうなると自死しかないらしい。

「どうかね」石田は柏原の顔を見ながら聞いた。

「そんなことをしたら、自殺幫助罪で訴えられる」

「あんたがやる訳じゃない」

その方面の知人を知らない訳ではない。こんな石田ならあの世に送つてやつた方が功德になるし、それに手数料も稼げる。しかし事が事だけに簡単に乗れない。

「一応聞いてみる」

「頼むよ」

「確約はできないけどな」

そう言つてひとまず電話を切つた。電話が終わつてから熱いコーヒーを飲んで一息ついた。自分が関わり合ふのは荷が重いから誰かに任せたい方がいゝ。金山という五十くらいと同業者を知っているが、世故に長けていて信頼できそうだから、こいつに請け負わせてやるつもりでいる。熟考した末に、五日ほどして新宿のカフェで待ち合わせた。

「まず、胸の内を聞いてやつてほしい」柏原は切り出した。

「じっくり聞いて、思いとどまらせませすか」

「しかし、奴さんは死ぬことしか考えていないから、それは難しいね」

「私に任せてください」

「ひとおもいに殺るのかね」

「それはまあ、そうだけけど」

「結果は金山さんが全責任を持つてよ」

「それは当然です。仕事ですから」

「私は何も指示していないことにしてほしい」

「分かっています」

「じゃあ、頼んだ」

少し世間話をしてから別れた。金山がひと足先に帰

つてから柏原は考え事をした。金山はどんな腹づもりか、どう説得するか聞いていないが、抜かりなくやつてくれるに違いない。彼は殺し屋と言われているほどだから度胸は座っているはずだ。その一方で柏原は気がでなく人が殺される場面など考えるだけでゾツとした。ところが五日後、夕刊を見て驚いた。予想とは違つた結果になつていた。石田がY公園で午前二時頃に不良の男達三人に囲まれた。

「オッサン、金を貸してくれ」せびられた。

「ない」

断つたら殴られた上に、三万円入りの財布を奪われて釣池に放り込まれた。暑い六月と言つても水は冷たく、必死に泳いで池から這い上がったらビショ濡れになつた。何とかして歩いて帰つたが命には別状はなかつた。

一体どうなっているのだろう。次の日、金山が管理入室にやつて来て、手数料の一部を返却し、事情を話した。石田に会つて一応説得したがどうしても応じない。

「金は要求通り払うと言つて聞かないから八十万円で呑んだ。当日、Y公園で石田と待ち合わせて事に及ぼうとした。ところが急用ができてやむを得ず顔見知り

の男達に頼んだ。いかにも嘘くさかった。

「殺人以上の重要な用事であるのかね」

「いやあの、家族に病人が生まれてね」

「ビビったんじゃないのかね」

「そうじゃないです」

「私は信じないよ」

「本当です」

「ところで、奴らは吐くんじやないのかね」

「それはありません。しかし石田さんは生きていて、

ますます辛い思いをするのだから、これはこれでいい

じゃないですか」

柏原は金山の口車に乗せられながら、内心では安堵

していた。金山は最初から自分の手を汚すつもりはな

かったのだ。彼は報告だけするとすまなそうに帰って

行った。

石田は何も言っていない。業界の者に当たってみた

ら、金山は人を殺したことは一度もないことが分った。

結局、石田は負傷しただけだった。石田に会って金を

返したら、俺はこのところ何をやっても運が悪いとこ

ぼした。

「いや、運がいいと言っていい。君は生き延びたのだ

から」

「これ以上生きたくないよ」

「元氣を出せ。これからいいこともある」 柏原は思わず慰めた。

半月した頃、古谷からいつでもいいからヒマな時に訪ねて来ないかとハガキが来た。仕事の帰り東中野に住んでいる古谷のマンションに行くと、整理整頓された居間に通され、品のいい奥さんがもてなしてくれた。古谷は、手足は不自由だが健康人と変わらないし、何よりも明るい表情をしていた。石田の話題になると、

「奴は哀れだね」

氣の毒がりながら嘲笑した。それで逼迫している状況を説明してやった。

「ほう、相当追いつめられているんだな」

「前途には何もないからな」 柏原は言った。

「奴はもともとワイルドな精神に欠けているよ」

「そうだ。過剰な自意識があるだけだ」

石田を適当にこき下ろした後、ところで…と古谷は照れたように笑って、本題に入るかのように真顔になった。

「俺、創作は断念したよ」

「エッ、またどうしてだい」

あれほど執念を燃やしていただけに、すぐに理解で

きず、一体何があったのだと古谷に迫った。

「俺の中のテーマが消えちまったんだ」

無理して書こうとしたから、それが祟って脳梗塞になった。恐らくこれからどんなに頑張っても芽が出ないだろう。病気の二の舞は踏みたくしないし、家族に迷惑をかけたくないから諦めることにした。幸いにも親の遺産が入ったから、生活に不自由はしなまいと言っただけだ。それなら、いいじゃないかと柏原は同意した。

「きっぱりしたい判断だね」

「心残りはあるけど、忘れることにした」

「古谷君の体のことを考えたら、賛成だね」

「なあ、そうだろう」

「心から同感だね。よかった、よかった。本当によかった」

「柏原がそんなに強調するのも変だけだ」

「あんたのために俺も嬉しいよ」

本当は競争相手がいなくなり自分が一番喜んでいられるのだ。二時間ほどいて、夕食をご馳走になり、楽しく酔って暇を告げた。石田もあんな体たらくだし、古谷もぼしかった。マリはどうしているのだろうか。色々話してみたかった。石田のことを心配しているふりをして電話をかけた。

「石田君は残念ながら後退したね」

「あの人は、ダメよ」

「古谷君は作家志望を放棄してね、妄念から解放されたみたいだね」

「あら、そうなの。志が重荷だったのか知らん」

「そういうことだね」

みんな、身分相応に生きようとしている。挫折してままならぬ人生だが現状を素直に受け入れているから感心である。

「マリさんはどうなの」

「そうね、私は第二の人生を歩めそうよ。恋人が出来るたの」

「えッ、恋人が！マリさんは美人だからね」

柏原の声は心持小さくなり、がっかりしてみたんだ。少なからずマリとの交際を夢見ていて、自分にも可能性はあるかもしれない。彼女がいいと言うなら付き合ってみなかった。だが、そんなことは全くあり得ない話になった。収入の少ないビルの管理人や便利屋では無理だろう。女には説得力がなさ過ぎる。それからほどなくして古谷から連絡があり、石田の兄貴が具合悪くなったとかで、認知症の母親の面倒を石田が見ることになった。

「死にかけてた石田が、そんなことできるのかね」柏原が聞いた。

「むりだな。そのうち共倒れになるのが落ちだよ」古谷が楽しそうに言う。

「あいつは、不幸や不運の連続だったからな」

「まず長生きはしないだろう」

「あいつ早くあの世に行ったほうがいい」

「すぐにそういう時が来るさ」

二人は言い合った。

月日が経った。聞くところによると石田は体にも肉がつき、表情も明るくなり生き生きしてきたそうだ。

亡父の保険金で生活し、母と暮らすことで生き甲斐を見出すようになったらしい。

《そんなはずはない…》

柏原が首を傾けた。彼の存在があればこそ楽しかったのにどうしたと言うのだ……抜け抜けと口走った。それからさらに日日が経って、柏原の体調がおかしくなった。彼は胸痛を覚えるようになった。段々と痛みは強くなっていき、持病の心筋梗塞か、それとも他の病気が併発したのか、どこか違うようだった。会社には当分休むと伝えておいた。今になって、誰もそばにいないのが寂しかった。その日、真夜中に激しい苦し

みに見舞われ、気を失った。そのままベッドの中で息

を引き取った。五十三歳だった。念願の金儲けもできずに孤独死で汚い腐乱死体になっていた。山口県の郷

里から柏原の姉妹が骨を引き取りに来た。

「達夫は医師にも事業家にもなれなくて、可愛そう」

姉は呟きながら手を合わせた。

「運の悪いアニキね」

妹も独り言のように口にした。